

らのウイルスがはじめから潜伏感染していた可能性も考えられるが、何らかの病態形成に関与している可能性も否定できない。

5. 当院で経験した新生児・乳児消化管アレルギーの2症例 (小児科学)

赤羽 麻衣、廣瀬あかね、呉 宗憲
西亦 繁雄、柏木 保代、河島 尚志
武隈 孝治、星加 明德

【はじめに】 食物アレルギー診療ガイドライン2012では、新生児期から乳児期にかけて食物が原因となる消化器症状を主体としたアレルギーを「新生児・乳児消化管アレルギー」と分類している。米国では本疾患を含む食物アレルギーの分類案が提唱されている。

本疾患群はIgE非依存型（細胞性免疫）の免疫学的機序が主体として関与していると考えられている。しかし、その病態は解明されてはおらず、臨床の現場ではこれらの疾患を厳密に診断・鑑別することは容易ではない。日本においては「新生児・乳児消化管アレルギー」の分類は未だ統一した結論には至っておらず、大きな課題となっている。今回、血便を主訴に当院を受診し新生児・乳児消化管アレルギーと診断した2症例を経験したので報告する。

【症例】 症例1：生後2ヶ月頃より2週に1度程度、便にスジ状の血液の少量付着を認め、生後3ヶ月頃より頻回となったため当院受診。ポリープを疑い注腸造影検査施行したところ下行結腸から直腸にかけて広範囲な狭窄病変を認めた。血清総IgE 2.5、牛乳特異的IgE<0.34であったが、末梢好酸球は11%と高値を示しミルクアレルギーを考え栄養をカゼイン加水分解乳としたところ、症状消失し注腸造影再検査にて狭窄病変は改善していた。後日行ったALSTでウシκカゼインとウシラクトフェリンで陽性を示した。症例2：生後2ヶ月頃より度々肉眼的血便を認めていたが生後3ヶ月時まで続いたため当院受診。母乳栄養であったが母親の乳製品摂取量と血便の相関性よりミルクアレルギーを疑った。血清総IgE<5.0、牛乳・カゼイン特異的IgE陰性であったが、好酸球実数660/μlと高値、直腸粘膜生検にて間質に多数の好酸球浸潤を認めた。また、ALSTでウシκカゼインとウシラクトフェリンで陽性を示した。栄養をカゼイン加水分解乳へ変更したが血便改善せずソルデム3Aによる経口補液を行ったところ血便は消失。その後、母の乳製品除去による母乳栄養へ移行した。

【まとめ】 当院で経験した2症例はいずれも症状は血便のみで発症し全身状態は比較的良好と考えられ、Food-protein induced proctocolitisに分類されると思われる。臨床経過・各種検査結果を比較し文献的考察を加え報告する。

6. ASK1は接触過敏における惹起相でのIL-17産生に重要である。

(皮膚科) 水上 潤哉、武田 弘資、坪井 良治
(東大・院薬・細胞情報)

水上 潤哉、一條 秀憲

接触皮膚炎は、頻度の高い炎症性皮膚疾患の一つであり、金属物質、防腐剤、毛染剤や多種の化学物質などのアレルゲンが原因となる。これらアレルゲンが外界に対するバリア構造である皮膚への外的刺激となり、過剰なストレス応答を引き起こしていると考えられる。ヒトアレルギー性接触皮膚炎のマウスモデルである接触過敏反応（CHS）は、これまで感作期に関わる分子は比較的多く報告されている。臨床的には、外来抗原の曝露を予防するのは困難であり、惹起相での炎症反応に関わる機構が明らかになれば、疾患の発症を制御することができるがこれまであまり報告されていない。

我々はDNFBを抗原として用いたCHSの解析で、ASK1KOマウスでは炎症反応が低下することを見いだした。また、DNFB感作後のリンパ節細胞の解析から抗原特異的なIL-17産生にASK1が重要な役割を担うことが示唆された。

さらに我々はChemical genetic approach（Analog sensitive kinase allele: ASKA）を用いて、ASK1のキナーゼドメインに変異をいれたノックインマウス（ASK1^{ASKA}）を作製した。このマウスはキナーゼに拡大したATPポケットをもち、一般的なキナーゼ阻害剤PP1の誘導体である1NA-PP1の投与により、薬理的にATPの結合と競合することでASK1のキナーゼ活性を阻害することができる。この手法を用いたDNFB感作後ASK1^{ASKA}マウス由来のリンパ節細胞の解析から、惹起相でのASK1の活性化が抗原特異的なIL-17産生に重要であることが明らかとなった。

これらの結果は、ASK1が惹起相でのIL-17産生に重要な役割を担うことを示唆し、CHSだけでなく獲得免疫機構を介したIL-17関連性炎症性疾患の治療ターゲットとなることが期待される。

7. 眼窩のリンパ増殖性疾患における表面抗原の解析による鑑別

(眼科) 上田俊一郎、臼井 嘉彦、木村 圭介
後藤 浩

(人体病理) 永井 毅

【目的】 IgG4関連疾患は全身の様々な臓器にIgG4陽性のリンパ形質細胞浸潤を伴う腫大、腫瘤、結節、肥厚性病変がみられる病態で、眼窩に発生した場合には他のリンパ増殖性疾患、すなわち低悪性度リンパ腫や反応性リンパ組織過形成と病理組織学的に鑑別が困難なことがある。今回我々は眼窩にみられるリンパ増殖性疾患の免疫学的表現型の発